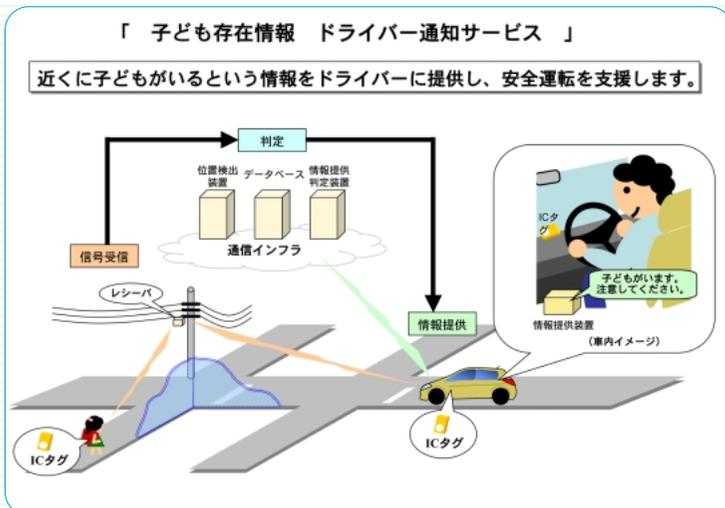


ITによる歩行者安全技術

地域の安全を守るため交通・救急・防犯の効果に期待！



ICタグとお守り袋。タグの中心に「通報ボタン」が組込まれている。



車載の「情報提供装置」

パソコンや携帯電話のインターネットブラウザ機能を利用して、ICタグを持つ児童などのいるエリアを検索したり、当日の移動履歴を確認することもできる。

ITを駆使した交通安全技術

近年、交通事故による死亡者は減少傾向にある反面、事故件数は年々増加しているのが現状だ。

事故ケースを大別すると「自動車対自動車」および「自動車対歩行者」に分けられるが、自動車同士による事故については、現在、国と自動車メーカー各社が「車車間通信」を用いた「情報交換型運転支援システム」の実用化に向け研究を進めており、この予防安全技術が普及すれば自動車同士の事故低減に大きな成果を挙げられるだろう。

一方、自動車と歩行者による事故の場合、都市周辺の住宅街は起伏や住宅の壁等により見通しの悪い交差点があったり、交差点と子供が遊ぶ公園が隣接している状況も見受けられるため、飛び出しや出会い頭によって子どもが交通事故に遭うケースが少なくない。

現在、この危険予知について「ITS」(Intelligent Transport Systems)を活用し、自動車の運転者が

「ICタグ」を持つ歩行者の位置情報を把握することにより、見通しの悪い交差点などでの安全な走行を支援する実験が一部の地域で実施されている。

これは、歩行者が携帯するICタグとCATV伝送路に設置した無線LAN基地局、自動車に設置した「情報提供装置」それぞれが無線通信を行うことで、たとえば自動車が住宅街を走行する際にICタグを持つ児童などが近くに存在すると、運転者に『近くに子供がいます。注意してください』と音声で注意を促す仕組みになっている(上図参照)。

また、ICタグに組込まれた「通報ボタン」を押せば、その付近であらかじめ登録された「駆付け支援者」や情報提供装置を設置する自動車などが通報信号をキャッチできることから、救急・防犯としての効果も検証されている。

今後、このような仕組みが定着すれば交通社会のあり方は大きく様変わりするだろう。同時に、整備工場が担う地域貢献のあり方も、救急・防犯への対応が大きな課題になるといえる。